オーディオ実験室収載

TruPhase の導入(19)
—11.2MHzDSD 音源の音質確認(1)—

１．はじめに

TruPhase の導入後、アナログ音源については前報(2)において、ディジタル音源については前報(3)から前報(6)において音質確認を行ってきましたが、ハイレゾ音源についてはごく一部しか実施していませんでした。今回は、11.2MHzDSD 音源を聴いてみます。

２．TruPhase の試聴方法

これまでの経過を踏まえ、P&G のフェーダーに替えてパッシブアテネーターの TruPhase を使用し、RCA 入力→RCA 出力とします。なお、AACU-1000 は TruPhase の入力側と出力側にセットします。

音源は fidata HFAS1-S10 に収納し、USB 経由で Brooklyn DAC+に送り出します。

fidata HFAS1-S10→Brooklyn DAC+→→(アンバランスケーブル)→(AACU-1000)→TruPhase→(AACU-1000)→(アンバランスケーブル)→Langevin 6V6pp

音源は、ディスコグラフィのページで報告してきた、SS 社から発売されてきた、一連の 11.2MHzDSD 音源の中から選択します。

チャイコフスキー他　くるみ割り人形(抜粋) 他
エルネスト・アンセルメ指揮コヴェントガーデン王立歌劇場管弦楽団
ステレオサウンド社 SSHRB-004

グスターヴ・ホルスト　組曲《惑星》
ズービン・メータ指揮 ロスアンゼルスフィルハーモニー管弦楽団
ステレオサウンド社 SSHRB-006

ヨハン・セバスティアン・バッハ　無伴奏チェロ組曲
ヤーノシュ・シュタルケル
ステレオサウンド社 SSHRB-005

イーゴリ・ストラヴィンスキー　バレエ《春の祭典》
ゲオルグ・ショルティ指揮シカゴ交響楽団
ステレオサウンド社　SSHRB-001

アントニン・ドヴォルザーク　交響曲第 9 番ホ短調新世界
イシュトヴァン・ケルテス指揮ウィーンフィルハーモニー管弦楽団

ステレオサウンド社　SSHRB-002
イーゴリ・ストラヴィンスキー　バレエ《ペトルーシュカ》
エルネスト・アンセルメ指揮スイス・ロマンド管弦楽団
ステレオサウンド社　SSHRB-003

３．TruPhase の試聴結果

ステレオサウンド社の BD-ROM 供給の 11.2MHzDSD 音源は、Brooklyn DAC+の設定を正相／逆相の切り替えをしながら聴いていきました。

チャイコフスキーのくるみ割り人形他は、正相で定位が曖昧で音像もぼやけますが、逆相にすると、オムニバスのそれぞれの曲の音像がくっきりとしてオーケストレーションの特徴が明確に出てきます。

ホルストの惑星は、正相で定位が曖昧になり、逆相にすると、木星などでは、ゆったりとした広がり感が現れます。

バッハの無伴奏チェロ組曲は、正相で定位がしっかりし、シュタルケルのチェロのボウイングの様が手に取るように分かります。

ストラヴィンスキーの春の祭典は、正相で定位が曖昧になり、逆相にすると、音像が立って、この曲独特の色彩感が際立ってきます。

ドヴォルザークの交響曲第 9 番は、逆相の方がオーケストラの各パートの位置関係がはっきりし、スケール感を感じ取ることができます。

ストラヴィンスキーのペトルーシュカは、逆相の方がオーケストラの各パートの位置関係がはっきりし、スケール感を感じ取ることができ、色彩感を堪能できます。

４．まとめ

fidata 収納の 11.2MHzDSD 音源の再生において、それぞれの持ち味が発揮されました。位相の把握も十分に可能でした。

以上